

東京台東区谷中細幅織物工場所有リボン現品調査

Manufacture of narrow woven fabrics (ribbon) related search for the actual article in Tokyo Yanaka, Taito-ku

権上かおる¹⁾, 山崎範子¹⁾, 菊池京子¹⁾, 真鍋雅信²⁾, 吉田喜一³⁾

1) 谷中のご屋根会 2) 澁澤倉庫

3) 東京都立産業技術高等専門学校名誉教授

Gonjo kaoru, Yamasaki noriko, Kikuchi Kyoko (Yanaka Sawtooth-Roof Heritage Society),
Manabe masanobu (THE SHIBUSAWA WAREHOUSE. CO.,LTD),
Yoshida Kiichi (Tokyo Metropolitan College of Industrial Technology)

1. はじめに

2013 (平 25) 年 9 月、東京都台東区谷中の商店街にあった 1919 (明治 43) 年 (もしくは前身となる 1894 (明 27) 年) からの細幅織物 (リボン) 工場が解体された。谷中のご屋根会では、洋書が主の文献資料を譲り受け、目録を前回の第 39 回本学会総会で発表した。続いて、リボンの現品についても同会が譲り受けることとなった。谷中のご屋根会は、リボン工場の鋸屋根部材 (2 連分)、100 冊以上の明治期の繊維文献 (含む見本帖)、リボン現品の保存活用が目的の地元有志の会。本発表では、商品現品、見本帖について検討結果を報告する。(本文敬称略)

2. 細幅織物の定義

幅 130mm とも 160mm 以下とも言われる織物のこと。福井県繊維資材工業組合 45 周年誌 (2009 年発行・同組合は 2013 年に解散) では、次の商品に分類されている。①織マーク (ネーム)、②織リボン、③畳縁、④帯、⑤ひも類、である。①織マーク (ネーム) とは、洋服の襟裏などにつく、タグのことである。②織リボンでは、用途により、包装用と服飾・装飾用に分かれる。明治時代後半では、前述以外に下駄の鼻緒、パラシュートベルト、包帯、勲章のタグ、女性の洋装等の用途も多かったと考えられる。

同組合資料によると福井県内全企業数のピークは、1971 (昭 46) 年の 1463 軒で、2008 (平 20) 年には、151 軒まで減少していた。なお、福井県の細幅織物産業は、京都西陣からの流れで始まり、織物に適した湿度などから現在でも日本における中心産地といえる。

3. 千代田リボン製織所 (東京 台東区谷中初音町 4-18) の沿革

年代	出来事	出所
1896 (明 29) ~ 1904 (明 37)	岩橋謹次郎 (白木屋創設者) 岩橋リボン製織所が渋沢栄一らの出資により匿名組合として、創業。帽子用リボンを製織。1904 年に匿名組合解散	渋沢栄一関連会社社名 変遷図 典拠資料 渋沢栄一記念財団
1904 (明 37)	三井財閥が買い取り東京リボン製織所	親族の証言
1910 (明治 43)	渡辺四郎が買い取り千代田リボン製織株式会社	*年代正確には不明
1921 (大 10)	渡辺四郎没	没後の状況は不明
1927 (昭 2 年)	工場長の青木道三の仲介で鈴木哲が買い取り、千代田リボン製織所名で創業	鈴木哲の子息の証言 および 5 周年写真

注1) 千代田リボン製織所創業者；渡辺四郎（1880（明13）～1921（大10））

注2) 1927（昭2年）、鈴木哲が「千代田リボン製織所」の社旗を製作、記念式典写真あり。

注3) 1914（大3）年に刊行された「東京近海遊覧案内」（渡辺松溪著）に「東洋一のリボン・テープ工場」として、千代田リボン製織の広告あり

注4) 「歴史からみたりボンと服飾」⁽¹⁾によると、「日本のリボンの輸入はじめは、1884-85（明17-18）年頃で、その10年後には岩橋謹次郎が国産リボンの製織を始めた」とある。

注5) 千代田リボン製織所の後を次いで経営の鈴木哲の子息、鈴木博之から10年程前に聞いたお話では「大正10年に亡くなった渡辺四郎から父が工場を譲り受けた。その時の敷地は280坪、従業員60名」といわれた。

現在の細幅織物産業界へのヒアリングを行った。川崎リボン(株)川崎健太郎社長（福井市）、東京リボン(株)川原正和会長（東京都）、東日本繊維資材協同組合（東京都）最長老の方および事務局の三者である。三者すべてが、「千代田リボン製織所名は、知らない」と答えられた。

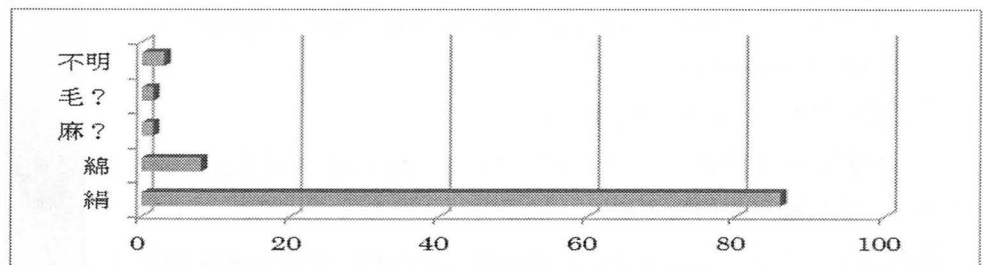
4. リボン現品の調査

現品は大きく、<商品>と<見本帖>に2分類される。

<商品と思われるもの>

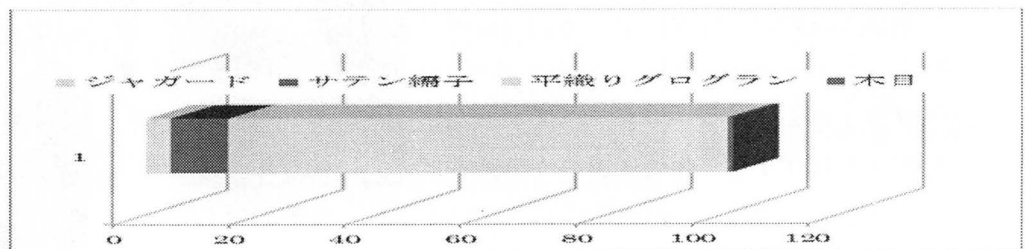
切片状のものも若干あるが、約210本のリール状。同種類も多数存在する。重複を避け、分類した。

①材質



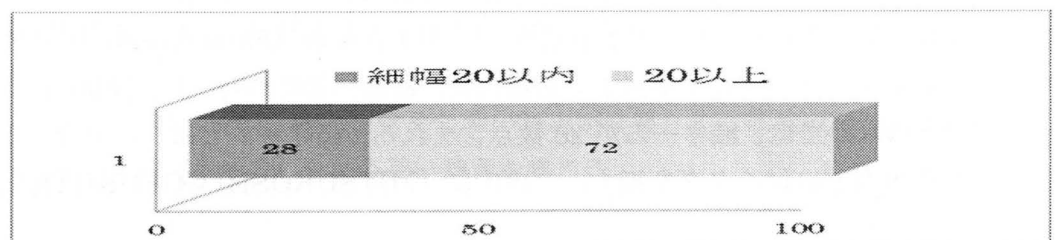
圧倒的に絹である。続いて木綿、麻や毛らしきものも存在した。

②織り



帽子用と推定されるグログラン織りを含む平織りが多い。

③リボンの幅



20mm以上の幅が多かった。

目視観察の範囲では、帽子用は全体の30%程度といえる結果だった。

④その他

タグ・メモ類

- ・荷札状のタグが数編認められ、「岩橋」「千代田リボン製織所」の文字も認められる。
- ・年代では、「昭和15年6月15日」「パナマ用 昭和14年11月30日」のタグが存在した
- ・品質保証書のような紙片が3枚存在した。アメリカの会社から発行されている川崎リボン(株)川崎社長、東京リボン(株)川原会長に全体を見ていただいたところ、「これら商品は戦前の昭和ではないか」と述べられた。

<見本帖に貼られたもの>

前回文献報告のB分類の中で、現品リボンの貼付が多い16冊を対象にした。

内容は、大きく3分類ができる。a)渡辺四郎がヨーロッパなどで収集したリボン b) 千代田リボン製品と思われるもの c)京都で購入したいわば他社製品(確認できるのは少数)である。

a)渡辺四郎がヨーロッパなどで収集したリボン

見本帖の大部分は、これではないかと推測される。時代も明治、大正ではないかと前出の2社長・会長の見解である。

b) 千代田リボン製品と思われるもの

<商品と思われるもの>に、同じものが多数見られた。生産が明治から昭和まで継続されていたのか、見本帖が交絡しているのかは不明である

c)京都で購入したいわば他社製品

「京都京極某商店にて」「一尺十九銭」などのメモ付きリボン以下に、観察結果を列挙する。

- ・見本帖のタイトルは、参所品、参考品、細巾類、束髪、舶来などとなっているが、必ずしも内容が合致しない状況である
- ・リボンについては、あらゆる織り、色、材質が存在すると言っても過言ではない。材質に絹が多いのは商品と同じである
- ・明らかにヨーロッパ産で、国産ではないと見られるリボンには、「フランスのリボン—サンテチエンヌ美術館—」⁽¹⁾と類似の文様や織りが存在する。先の洋書の文献調査にて、「1910年、サンテチエンヌ」という渡辺四郎住所印があった。現地のコレクションと考えることもできる
- ・非国産と考えられるリボンにはエンブレム仕様が、含まれる。このなかには、1820から60年頃の最盛期には、リボン産業に3万人が従事していたと言われるサンテチエンヌ市(Saint-Étienne)のエンブレムと思われるものもあった。市の主要産業である武具、鉱山、織機が描かれ、1898年の年号もある(写真1)
- ・国産のなかでは、織ネームが20数点含まれる。織ネームとは、ジャガード織りで作成する洋服の襟裏などに付くタグを指す。この中に「MITSUKOSHI GOFUKUTEN」(写真2)が3枚存

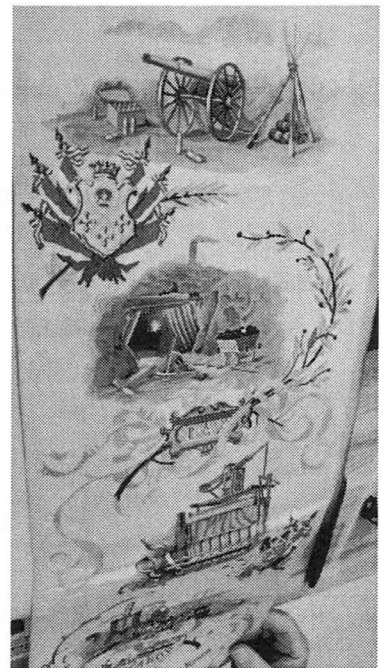


写真1 サンテチエンヌ市
エンブレムリボン

在する。三越に問い合わせると、この名称は1904（明37）年～1928（昭3）とのこと。この期間に千代田リボンが納めていたものと考えられる

- ・見本リボンの横にメモ書きされるなどの文字情報は、極めて少ないが、以下が認められた

‘客先の記述’

東京帽子／齋藤メリヤス製造工場の注文（明治と考えられる）31年10月織りなど／大阪濱谷ノ注文／大黒屋光之助注文／東京リボン商会

‘年代’

（明治と考えられる）30年、31年製織／40年、41年製織

‘用途の記述’

編シヤッチノ紐／サルマタノ紐

‘職人名’

青木道三／青木トミ／富岡クラ／堀越トク／大貫カエ

‘織機番号’

第六号機／第十号機／第十一号機／第十二号機

‘原料’

経四十二ノ撚糸 緯糸十八ヤードニ付キ三十四匁ノ割

‘定価’

一ヤール四銭五厘

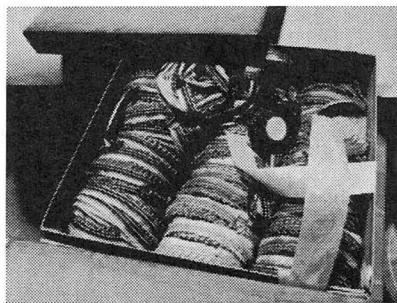
- ・千代田リボン製織所名の入った見本帖のうち2冊に、「工務課」（写真3）および「仕上部」と書かれたものがあった



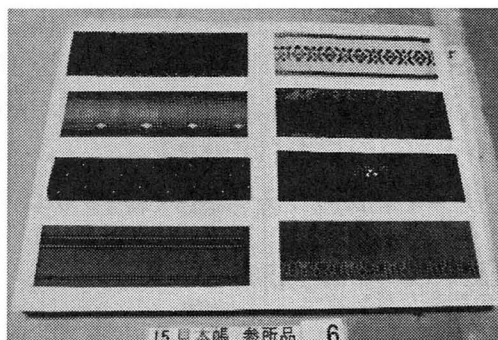
写真2

織ネーム

MITSUKOSHI GOFUKUTEN



商品リボンの一例



見本帖の一例



写真3 工務課の記載

5. リボン現品の調査のここまでの到達点—おわりにかえて—

- 1) リボン現品については、特に見本帖は、貴重なものであり、現時点での収集は困難である
- 2) これだけのコレクションは、資力、労力を含めた強い意志が必要。ここに渡辺四郎の「日本国内でリボンを製作し、普及させる」という強い熱意を感じる
- 3) 歴史からみたりボンと服飾⁽¹⁾によると、明治のリボン事情要旨は以下である。

「明治末期がリボンの最盛期。女子学生束髪リボン、編み上げ靴、パラソルが定番。看護婦の正装に黒リボンは欠かせない。肩帯も。まさにリボンは近代化の象徴。風俗画報 流行門によると、明 33 年、束髪用リボンは淡色が多く、木地は木理（木目）の舶来品。幅は 1~1.5 インチ。明 40 年、リボンの幅広くなり、流行は、無地、木目、色はオリーブ、紅、紺、紫。肉厚なものから絹、紗、すかし織、反対にベルベットも人気。明 42 年には、関西では、女学生のリボンは 1 インチどまりで、東京のような 3,5,6 インチのような幅広なものは少ない」
この文で触れられるリボンのほとんどは、千代田リボンの操業と年代は重なり、また織りや色は見本帖に存在する。また、文明開化の中心地であった東京と関西の差も述べられている。東京のリボン産業の質の高さ、需要の多さも感じる。

前述のように岩橋リボンで国産の生産が始まったとある。岩橋の跡を継いだ千代田リボンも当時のリボン生産の中心だった可能性もあるのではないか。

- 4) 川崎リボン川崎社長のお話では、見本帖から「ここは、相当大きな工場だった」と言われる。しかし、現リボン産業の方々は「千代田リボン製織所名は、知らない」と答えられる。戦後まで生産を続けていたにもかかわらず、リボン産業界から、なぜ忘れ去られることになったのかは謎である

謝辞

オリジナル部材の保存にご理解くださった旭プロセス製版、澁澤倉庫、地元町会各位、文献資料を大切に保管されていた鈴木家の皆様、解体の危機の中で参集した谷中のご屋根会の仲間、のこぎり屋根に関心を寄せてくださった多くの方々、末筆になりますが、ここまでご指導いただいた玉川寛治さん、リボン産業のことを丁寧にお教えいただいた川崎リボン(株)川崎健太郎社長、東京リボン(株)川原正和会長、突然のメール問い合わせに迅速にご対応いただいた東日本繊維資材協同組合、三越伊勢丹ホールディングスに深謝いたします。

対象資料

見本帖類 (15 見本帖 参所品/16 見本帖 巻 参考品/17 見本帖/18RIBBONS (リボン) 渡辺四郎名入り/20 細巾類/見本帖/21 束髪見本帖二/22 舶来見本帖と同種だが題名欠落/23 舶来見本帖/24 舶来見本帖/25 舶来見本帖/26 手製の大判スクラップ タイトルなし/27 手製の大判スクラップ タイトルなし/28 見本帖/29 見本帖/30 見本帖/31 見本帖)

商品 約 210 本のリール状の商品リボン

参考文献

- (1) 石井彰 (文化女子大学教授) 「歴史からみたリボンと服飾」 および 「リボン写真図版」 フランスのリボン-サンテチェンヌ美術館-学習研究社 (1981)
- (2) 大塚久雄 18 世紀イギリス文化の特質-オランダ織機を通じてみた- (1980 年齋藤勇博士記念学術講演)
- (3) 谷中のご屋根会 「谷中の『のこぎり屋根』 のこ屋根編集室 2014 年
- (4) 地域雑誌 「谷中根津千駄木」 谷根千工房 1984~2009 年
- (5) 月刊のこぎり屋根 <http://nokoyane.com/> (見本帖各頁の写真を近日中にアップの予定)